

---

# 異世界召喚（二週目）・ハードモード（仮）

It.

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界召喚（一週目）・ハードモード（仮）

### 【著者名】

It.

### 【あらすじ】

勇者として異世界に召喚されたユキトは、魔王倒した。目的を達成したので地球に帰らなければならないはずが、行き着いた場所には見慣れた景色が。森の中で再び会った彼と話をし、同じ世界であることを知る。時間を遡っていることも。倒した魔王にまた挑むため、ユキトは勇者としてまた旅に出る。

友情、恋愛、葛藤。さまざまな想いを描きながら突き進む、異世界勇者の物語。（ハードモード）

## 第一話『別れの言葉。』

異世界召喚なんてはた迷惑な概念がある。

平和な日常を、それにどんな感想を持つているのかは置いておくにしても、事情なんて無視をして無理やり自分たちの都合のいいようにある人物を自分たちの世界に呼び込む。

大抵の場合として、元の世界には帰れません。もしくは魔王とか世界の敵を倒してくれれば、なんて勝手なオプション付きだ。自分たちのことしか考えていない。

召喚されてしまった人物は右も左も解らない世界で、頼れる相手がいるわけでもなく（たまに友人と一緒に、というのはあるが）非常で非情な世界に放りだされるのだ。召喚された場所、時、場合によつてはすぐに命の危機に瀕することだって少なくない。

なかにはなんらかの能力や、生き抜くための武器を得て活躍する話なんてものはあるが、現実的に考えて不可能に近いだろう。その世界の常識ルールによって違うが、仮に武器を持つて戦うことが普通の世界としてみよう。

武器は刃物。一般的に西洋剣と言われているものでいい。

さて、それをただの一般人が持とどうとすればどうなるだろう。

答えは簡単だ。

そもそも持ち上がらない。

例え持ち上げようとも、重さに耐え切れずに振ることなんて出来やしない。重さに耐え、振ることができたとしても、振り方を知らなければ、何もまともに切ることなんて出来ない。

それだけじゃない。武器を扱うための経験や知識。どこで使つべきかを取捨選択する思考。武器を振るう、つまり殺すということを受け入れる感情制御。

どれもが殺戮が日常的な非日常世界では必要なものだが、平和な日常で過ごしたただの人では手に入ることなんて出来ない。

こんなふうに、剣一つにとつても問題視することがある。

他にも、生活基準、対人関係などなど不安なことなんていいくらで  
も出で来る。

つらつらと述べてみたが、結局何が言いたいかといふと、異世界  
召喚なんてお断り。迷惑でしかないつてことだ。

もつとも、こうして批判しているのも、それを自分自身が味わつ  
たからこそ、なのだけれども。

喚ばれた【勇者】はただの【学生】だった。  
もういつの日だつたか、学校に忘れ物をして暗い校舎を歩いてい  
た時、教室から不思議な暗い明かりが見えてた。自分の教室だつた  
し、何なのが気になつたのもあつて入つてみれば 気付けば  
見知らぬ森の中だつた。

そこからは森でいきなり熊つぼいなにかに襲われかけ、それを通  
りかかりの人物に助けて貰い、村に連れてかれた。まだ状況整理が  
出来ておらず、ありのままに喋つてみれば、勇者ではないのかと言  
われ王都へ連行された。

王都に着けば、まずは城に通され、異世界召喚をしたこと、勇者  
として魔王を討つてほしいこと、帰る方法は魔王を倒せばあるいは、  
なんてことをなんちやらかんちやら説明され、多少多めの路銀だけ  
持たされ、旅の仲間として【召喚の巫女】が付いてくるだけでさよ  
うなら。

展開に付いていげずに途方に暮れつつも、良い仲間にであつたこ  
とで少しづつ進み出していく。

そして、指の数では到底足りない死地の数々をくぐり抜け、つい  
先日、ようやく魔王を討つことが叶つた。満身創痍での勝利ではあ  
つたが、その日の夜、大陸を越え、長く濃密な体験を共にした仲間  
たちとささやかに上げた祝勝会を忘れるはないだろう。

そして、自らの世界に帰るため、皆に別れを告げたあの日も。惜

しむ気持ちまあつたが、元は地球の住民のため、いつまでも居続けるのは、あまり良いことではない。

密かながら、互いに思いを募らせていた相手、【召喚の巫女】のアリストイとは、別れの間際に向こうは常に身につけていたネックレスを、こちらは旅の間も持ち続けた、自分が地球にいた証でもある制服のボタンを交換した。その一つを魔力糸で結ぶことで、世界が違えども互いを感じることは出来る。

別れの儀式の時、仲間たちが田畠くも首にかかつたアクセサリーが変わっているのを見付けられ、からかわれたのも恥ずかしながらも微笑ましく、別れの近さに淋しくなった。

そして、別れの時。

送還魔法陣の中心の真ん中にたち、友に旅をした仲間たちを見る。気付けば、勝手に口が動き、ひとりひとりと思い出を確認しあい、感謝の言葉を述べた。それだけでもう視界は滲んでいたが、田の前に列を作る仲間の中にいるはずのない『彼』が見え、ずっとと言えずにいた感謝の言葉を送った。『彼』が微笑んだ氣がするのは、きっと氣のせいじゃないだろう。

静かに泣く【勇者】に声をかけたのは、【召喚の巫女】だった。

【勇者】は最後に、想い人である彼女へ語りかけた。  
弱くてごめん、と【勇者】は言つた。

【召喚の巫女】はそれもあなたの優しさの一部だ、と言つた。最初は嫌つていた私を、いまは受け入れてくれていることも、とも。成熟しきれない精神は弱く、されどそれが優しき証でもある【勇者】は、彼女の言葉に『ありがとう。俺は、お前をこの世界で一番好きだ』と、何よりも強い想いを伝えた。

それを最後に、魔法陣に魔力を流す。勇者の送還魔法では、召喚魔法と違つて勇者自信の魔力を流すことで完成する。

じゃあな、仲間たちにそう告げ、彼らの思い思いの返事を耳に聞き入れた瞬間、視界に目一杯の光が入り、意識が暗転した。

さて。冒頭で異世界召喚を批判していたが、その異世界で過ぐすことへの抵抗は、日々を追ついでに少なくなつていったことは分かつて貰えただろう。

だが、さすがに一度も同じ経験をするのは「めんだ」と、元【学生】、元【勇者】、現在は【??】のコキト・オームラは思わずにはいられない。

意識が目覚め、まず状況を確認してみれば  
見覚えのない  
森の中にいた。

地球じゃないと分かつた理由は、いつぞやの時とは違い、辺りにある植物や樹木の観察したためである。地球にはないであろう植物、そして虫がいた。

決定打には欠けたが、むやみに動かない理由にはなり、川を見つけ出して一夜を過ごそうと夜を迎えた。夜になつて見上げた夜空には、光を反射させた星が一つ昇っていた。

見たことのあるその夜空に、コキトはびっくりようもなく不安に駆られるのだった。

## 第一話『森の中で再びお前と』

不安を胸に抱えながらも一夜を過ごした。待っていたのは、変わらない風景だけであつたが。

固まつてしまつた体をほぐすようにストレッチをする。適度に温まつたところで、構えを作り、ステップ、軽くパンチと蹴りの確認をし そこで気付く。

「……癖つて抜けないもんだな」

旅をしていた頃の習慣だつた。毎朝誰よりも早く起き、見張りがてらに自主トレーニングをしていたのを思い出す。いまも特に意識をせず、自然とやつていた。少し寝ぼけながら、というはあるが。

状況が変わつても、変わることはあるとこことを実感する。「でも、野外で一人で夜を過ごしたのは初めてか」ユキトが憂いたのは、故郷にある愛用のベッドではなく、背中を預けられる仲間たちだつた。

旅に出た時から【召喚の巫女】のアリステイ、そしてあの世界で初めて会い、一番世話になつた『彼』と一緒にだつた。

ネックレスにぶら下がつて、小さな綺麗な石に触れる。アリステイが一番大切にしていて、彼女の魔力をが篠められたものだ。いまは魔力を感じられいが、彼女の想いはいまでも感じることが出来る。

そして、村人であり、ユキトが恩人、親友ともいえる『彼』のことを思う。

ありがとう、と呟き、ユキトはしばらく目をつむつた。黙祷。これもまた、毎朝していることだ。

記憶に思いを馳せながら、また身体を動かす。

そうすることで、少し余裕が出来た。  
この先、どうするかについて考えを巡らせる。

(どんな世界であるのかを知るのが第一だ。……月が一つのこと  
は、可能性がないわけじゃないよな)

僅かながら希望を胸に燈す。ずっと見続けた夜空にも月は一つあ  
つたのだ。また同じ世界、といつ可能性だつてあるはずなのだ。

そうすれば、また彼らに会つことが出来る。恐らく一生の別れを  
告げたというのにまた会つというのは、少なからず恥ずかしいも  
のはあるが、それもまた人生とでも言えるのではないか。少し頬が  
緩む。

だけど、理由がわからない。たしかに魔王は倒した。各国の抗争  
も落ち着いた。『勇者祭』とかいうので起きたインフラもも收まり  
つつあつたし、<sup>ユキト</sup>急激な経済的な落<sup>ト</sup>下もそこまで心配ない。なにより  
そんなことに勇者は必要ない。

勇者であるユキトに求められたのは、魔物からの迫害を畏れる人  
民の希望だつた。ユキトの物語の舞台は、小説にあるような人語を  
理解する魔族はおらず、本能のままの魔物ばかり。彼らを操るのが  
魔王で、人間とは異なる価値観をもつた正真正銘の化け物だつた。  
異種族はいたが、人間との関係は良好であり、問題は起きなかつた。  
だから、魔物を統べる王だけを討てばよかつたのだ。もつとも、  
最後まで謎が解けないままに舞台を降りていった、魔将を名乗り人  
語を扱うイレギュラーはいたが、倒した以上はさほど問題視しなく  
てもいいだろう。

となると、やはり同じ世界だとしたら、また迷い混んでいるこの  
状況が不思議でしかないのだ。魔法の事故、とも考えたが、アリス  
ティが失敗したところなどよほどのことがないかぎりありえないし、  
なによりあの部屋は彼女が万全であるために作られた部屋なのだ  
から、事故の線は薄い。

「考えたところで、答なんて出るはずもない、か」

ユキトは魔法について学を持ち合わせていない。魔力を感じるこ  
とは出来るが、魔法というに概念には馴染めなかつたのだ。下手に  
地球で科学を習つてしまつたのからかもしれない。何もないところ

から、なにも使わずに火を起こすのは理解しがたかった。

その代わりとでも言おうか、『氣』というものに関しての順応性はあった。

自らを高める鬪氣が、スポーツで氣合を入れる時の感覚に少なからず似ていたからだ。それもあって、ユキトは拳による戦闘を好み。他にも理由はあるが、自分に合っているからというのが一番大きい。

身体に巡らせていた『氣』を解き、呼吸を整えていく。落ち着いたところで、汗を流すために川に入ることにした。

着ているもの 着ていたのは、身体の動きを阻害しない麻布のズボンと綿の上着だった。を脱ぎ、下着だけの姿になつてまずはそれを洗つて日当たりのいい岩に干す。乾くのに時間がかかりうるので、適度に川の探索をすることにした。

水は綺麗で、生き生きとした海藻が踊り、見たことのない形状や色をした魚が泳いでいる。

「綺麗だな……」

なにをする宛もないというのに……いや、宛もないからこそ、純粹な感想が口からこぼれ出ていた。よほど澄んだ川なのだろう。そして川だけじゃなく、周りにある静寂な森。そこからは風の吹き抜ける音や、鳥の<sup>さえず</sup>囀り、動物がいる微かな気配が伝わってくる。そんなことを感じながら穏やかな時を過ごしつつ、日が良い感じに昇ってきたころだつた。

そう遠くない川添いの辺りから、不意に物音がした。

自然の音ではない。明らかになにかが地面を踏んだ音だ。そこまで瞬時に考えを巡らせ、油断しきつっていたことに叱咤しつつも振り返りながら臨戦体勢をとる。

振り返ったその先にいたものは いや、人物はユキトに驚愕を与えるには充分すぎる人物だった

「…………なんで……なんで、お前、が？」

思つようにも声が出ず、掠れた音が耳をうつ。いつの間にかユキト

は田の前の人を観察していた。そうあることで、違つとこ「ひ」とを確かめたかつたのかもしれない。

青年だ。コキトよりやや年上くらいで、髪は赤みがかつた茶色。遠田でも分かるくらい、陽気な雰囲気が出でこる。

田をひくのは、腰に剣をぶら下げて、膨らんだ革袋を担いでいた。腰にあるその剣も、そしてその顔も見たことがある。

いや、見たことがあるレベルの顔じゃない。

コキトが絶対に忘れないと誓い、そして忘れることも出来ないだろう相手。

その彼は、担いだ革袋を地面に降ろすと、コキトに一言

「久しぶりに来てみりや、珍しいこともあるじやねえか。

よう。 その野生児！

いい魚でもとれてるかー？」

間違いなく『彼』の声、そしてあの親しみ易い口調で問い合わせてきた。

記憶にあるその姿に思考が停止し、いつの間にかコキトは作っていた構えを解いていた。

まるで旧知の仲である友人へかけるような快活さに、コキトのことを分かっているのかと疑う。もし知ってるのなら、『彼』は世界の理と神様にすら逆らつたことになる。

「どうして、だよ……」

『彼』と会つたのは、もう、一年近く前。あのときも森の中だつた。キラーベアーに襲われたコキトを助けた青年。

「なんで、お前が生きているんだ……アラム……つー……」

掠れた声が宙を震わせたが、どうやら『彼』には聞こえなかつたらしい。

「ん？ なんだ、そんなに驚くこともないだろ。こへり邊鄙な森だからつて、誰とも会わないわけじやねえんだからよ」

少々的外れなことを言いながらも、コキトの姿を不思議に思つたのかゆつくりと近寄つてくる。その姿が近くなればなるほど、疑惑

は大きくなる。

近い川辺にまできて、彼の顔がしつかり見えた時、ユキトはもう疑うことを見めた。

「どうみても彼はアラム。」

かつてユキトと共に旅をし、そして彼を庇つて世界をたつた男。彼は水際にくると水面をみて、

「あつれ、魚がいねえな……」

ひとり落胆した。その呑気さに、毒氣を抜かれたような気分になる。もうただ驚いているのが馬鹿らしくなつた。脳天氣はアラムの代名詞のようなものだつたじゃないか。

それに。

ユキトはもう色々なことを経験している。地球という星の中にある、日本という土地で生きていたころから比べてみれば、有り得ないこと、それも空想上のものでしかなかつたものが現実となつてゐる。初めて遭つた時には困惑し、なにも出来なかつた。理不尽さに涙を流したこともあつたくらいだ。……これは誰にも言つたことはないが。

だが理不尽だといつて喚くだけではどうにもならず、微かな希望を胸に一つの世界を救つた。語り始めればキリがないそれを経て、ユキトは現実を認識して柔軟に受け入れるくらいのことは出来るようになつた。

「だつたらいまもそうすればいい。」

ここまで近くにきて、ユキトの顔を見てもアラムはなんの反応もしなかつた。ユキトのことを覚えていないのか、わざとなのか、それとも知らないのか。

もし知らないとして、これが夢じやないのなら、もしかしたら時間の移動でもしたのかしれない。そんな考へても、無理矢理自分を納得させるくらいには、ユキトは非日常に慣れてしまつていた。

というより、非日常が、いつのまにか日常にすげ替わつていたのだけれど。

心を落ち着かせたといひで、探るよつに声をかけた。

「あんた、誰だ？」

「俺か？」

答えはもう予想がついており、ほぼ間違いないのだけれど、それでも聞かずにはいられない。短く返事をして先を促す。

「俺はカタイロの村のアラム＝ジトニコフだ。よろしくなにこやかな笑顔と共に返ってきたのは、いつの日か聞いたことのある台詞だつた。

知つてゐる。

かつて訪ねた地。

普通は初めて会つ相手に言つ葉の『よろしく』を使つたこと。ここまでくれば間違いない。いまユキトがいる世界は、時間をさかのぼつた、ひとつ前と変わらぬ世界だつた。

## 第二話『再会した彼は、記憶と同じで同じでない』

割り切ることにした。

なにを、と聞かれれば答えに窮するが。そんな状態が、ユキトの今の不安定な心境を物語っている。

すでに一度、『勇者』として知らない世界に放り込まれた経験があるため、当時よりは柔軟な対応が出来ている。わけもわからず、ただ困惑して何も出来なかつたあの時よりは成長している。そういうユキト自身は断言出来た。

だが、今回はその経験が逆に今のユキトを困惑へと蝕んでいる。

同じ世界。

しかし時は遡り。

再会が不可能な友に再会する。

見覚えがない土地（結果的には知る土地だったが、ユキトはあまり覚えていない土地だった）に飛ばされたといつこのには、余裕があるなど自分で感心するほど冷静に対処が出来た。

一夜あけて。

不安も多少は解消され、とりあえずあてもなく水浴びをしている時に、それが起きた。

ユキトは切実に問いたい。

死んだはずの人間が生きているって、そんな話があるか？  
夢じやない。幽霊でもない。たしかに、生きている。

ユキトの記憶の中と変わらぬ姿で。けれど決定的に違う部分を携えて。

それは、ユキトのことを知らないこと。

困惑を示すメーターは知らず知らずのうちに振り切らた。だからだろうか。通り越した困惑は、ユキトに一時的にではあるが余裕を与えた。

余裕が出来たおかげで考へが巡り、同じ世界でも時間を遡つてい

るのではないかと仮定できた。そして、それらを割り切ることも。

それが出来たおかげで、アラムにもなんとか対応ができた。そして、そのままアラムに誘われる通りにコキトは森の中を歩いている。

狩りをするためだ。

腹に何もいれないまま過ぎ」していたコキトは、アラムと話しているうちに不本意なことに盛大に腹が鳴ってしまった。それを聞いたアラムは、これ幸いとでも言つように狩りに連れ出したのだ。

空腹を訴えている上に、狩りの経験があるのかも聞かずに強引に連れ出す姿に、同じだな、という感想を持つてしまつ。不意に過去の記憶が蘇り、足が止まる。

不意に止まつたからか、アラムが声をかけてきた。

「いじら辺にたぶんいるぜ。ん？ どうかしたか、コキト？」

「……いや、なんでもない。ちょっと考えごとしてただけだ。気にしないでくれ」

「あいよ。じゃ、気を張つていけよ。集中不足で獲物を逃がすなんてまつぱら」めんだ

「そうだな。俺も早く空腹をなんとかしたい」  
氣を引き締めて歩き出す。ただ、頭の中ではじつも昔のことを思い出してしまつ。

アラムと狩りをすることは、旅の中で何度もあった。要領がイマイチ分からぬまま旅に出たので、食料が次の街まで持たないことがあつたのだ。

そんな時はアリストイに木を集めて火を起こしてもらい、その間に近くにあつた適当な草原や森、川でアラムと共に狩りをした。頻度がそれはもう多かつたため、次第に狩りのスキルは自然と身についていった。

ただ、ユキトもアラムも罷は作れないし、「もそんなに得意ではない。アラムは村の近くの森（つまり、いまコキトがいる森）で狩りの経験があつたとはいえ、慣れない地では思つように事が進まなかつたりもした。

その点、今回はアラムは地形や獲物を特徴を知っているため、かなり堂にいった狩りの行動をしている。今も狙い目の獲物がいるらしいヒリアに入つてからは、足音を殺し、周囲にかなり注意を向けている。

発見は予想以上に早かった。

「見つけたぜ」

アラムが指差す方向を見れば、暗い赤茶色の毛をすんぐりした身体に纏い、四足方向で移動するイノシシのような生き物がいた。

「あれは？」

「コトイノイってやつだ。肉は脂もほどよく乗つてて血こし、大きな牙と比較的丈夫な毛皮は加工品としても重宝する。狩りの獲物としては、かなりアタリだぜ」

狙つて探したんだけどな、と言つてアラムは笑うが、よつはそのコトイノイという生き物が、森のどの辺りに住んでいるのか、どんな時にどこに現れるのか、そういう生態を知つていいということだ。そういう所に詳しいのは、やはりアラムか、とユキトは変なところに感心する。

「さすが、狩りと資源集めだけで生計を立てれる体力バカなだけはあるな」

小声で呟く。こんなこと聞かれたら、アラムに叩かれそうだ。弓や罠を使わない時点で効率的ではないし、体力バカも事実だしいいか、とひとり納得する。

「それで、どうやって仕留めるんだ？」

「もちろん、ユキトにも手伝つてもらうぜ。……あ

「どうしたよ、いま重要なことを思い出した、みたいな顔をしてよ」

「ユキト、お前、狩りの経験つてあるか？」

「…………よつやくこま聞くのか。やつぱり、そういうところが抜けてるよな」

「う、うるせーな。うつかり忘れてただけだぜ！？…………あれ、やっぱりつてなにがだ？」

「あー、いや、なんでもない」 目の前にいるのが『アラム』だから、いつの間にか碎けた口調を使ってしまい、内心焦るユキト。目の前の人物は、『アラム』ではあるけど、まだ初対面だといふことを忘れないようにもう一度心に留める。

同じ世界でも、どんなことが起きるのか分からぬ以上、ユキトがすでにアラムのことを知っているのは、隠すべきだ。下手なことをして、不測の事態に巻き込まれるのは必ず面倒になる。

疑問を逸らすため、強引にでも話題を戻す。

「それで、狩りの経験はあるよ」

「そりやよかつたぜ。やっぱ人は見かけによらないな」

「どういう意味だよ、それ」

「会った時から思つたんだけど、ユキトってどうも優男みたいな雰囲気がな。生き物は殺せない！ ってなこと良いそうな顔をしてやがるぜ」

「……よく言われたよ。でも、生きるために。昔はそんな時期もあつたけど、いまは躊躇わない」

『勇者』となつて間もない頃。まだ慣れない剣を扱おうと、必死になつていたころだ。

初めての狩りの時、『アラム』に同じことを言われた。その時は虚勢を張つて、そんなことはないと言つたが、実際に目の前にいる獲物に剣を突き立てようとした時、どうしても出来なかつた。その油断のせいでの反撃をうけ、胸に怪我をした。その傷は、いまでも残つてゐる。

生きるために躊躇をしてはいけない。それを忘れないために、回復魔法もあまりかけてもらわず、残したものだ。

「それでこそ男つてやつだぜ。やっぱ、男の生きがいは生きるか死ぬかを競い合つとこだな！ くーつ、わかるじやねえか、ユキト！」

「ああ、そうだな。まずはあいつを狩つて食つか！」

急にテンションの上がつたアラムに苦笑しつつも、懐かしいそのノリにユキトも思わず合わせてお互に手を立てて強く握り合つ。

「やるゼー。」

「おひー。」

お互いにやる気を高め合って、まあ狩りをしようと獲物の方をみれば

「あ、あれ？」

「…………いなー」

赤茶の体表をしたイノシシもどきは、二つの間にか消え去っていった。

ユキトとアラムが、逃がしたのは互いのせいにしだして、さらに周りから動物たちが逃げていったのは一人には預かり知らないことである。

## 第四話『仲の良むは不思議と変わらぬ』

「なんとかなつてよかつたぜ。なあユキト」

「この男は……。どうしてこんなに元気なのだらうか。

「アラム。初対面の相手にこういう押し付けるような言い方は好きじゃないが、今回の苦労の原因は確実にお前だ」

「なに？ 馬鹿言つんじやねえ、違うだろ！ お前がやつさと、狩りに行こうとしないからだぜ！？」

「はあ？ お前があんだけ騒がなかつたら、獲物が逃げるわけないだろ！」

ユキトとアラムの口喧嘩……といつより、もうただのじやれあいは、狩りが終わつて川のほとりについても続いていた。不毛な争いは、まだ終わりそうにない。

もつとも、どつちが悪いだ、悪くないだといい合いつづけながらも、アラムは手際よくコトイノイを解体し、ユキトは肉を食べやすいサイズに切り取り、アラムが持つていた鉄串に刺してたき火にあてて調理をしている。この息のピッタリさは、二人の仲が良い証拠だろう。

初対面の相手に気兼ねなく接するアラムの快活さもあるが、ユキトが『アラム』を知つていることが大きかつた。アラムの行動や癖は、ユキトにとつてはすでに馴染み深いものであるのだ。

なにより、楽しい。

まるで、『アラム』と馬鹿騒ぎしているかのような……いや、アラムと馬鹿騒ぎをしているのだ。楽しくないはずがなかつた。

アラムもアラムで、初対面のユキトと遠慮なく楽しんでいる。憎まれ口を叩きあつても、アラムの根は変わつてない。それにユキトは少しだけ安堵した。

「にしても、ユキトと俺の息がピッタリだつたな。驚いちまつたぜ

「俺もだ。ここまで合つとは思つてなかつた」

コキトの言い分けは嘘だ。長い間を『アラム』と過ごし、何度も何度も近くで彼と戦っていたコキトにとって、アラムの動きに合わせてお互いに動きやすい位置取りをすることくらいは造作もない。

息が合うと言つよりは、コキトがアラムに完全に合わせていた。それができたおかげで、狩りの時間 자체は、獲物を探すのに異常に時間費やしただけですんだ。仲良く（と本人たちが思つているかは微妙なところだが）騒いでいなければ、たとえ些細な危機を察知して逃げる野生の動物たちでももつと早く見つけることは出来たはずだ。

けれどコキトはその点には触れず、ゆっくりと楽しい時を過ごす。肉も焼けてきて、まあ食べようか、そんな時だった。コキトの耳に、微かではあるが異音が届いた。

（草の音……風じやない。もつとでかい何かが踏んだ音だ）音の間隔から、人でないのは明らかだ。人とは違うリズムで刻まれる音から、四足歩行の何かだと当たりをつけた。

「アラム。この辺りにいる……おい、一旦食つのを止めろ」アラムが皿そうに頬張つている肉串を取り上げる。むちゅんアラムは講義の声を上げるが、コキトは無視する。

「あとにしろ、あとで。とにかく、いまこのあたりにいそくなやつは心当たりないか？」

「んだよ、つたく……。えーっと、この辺？　ここは川も浅瀬だし、どちらかと言うと森の外田部だしな。とくにいねえと思うぜっ？」

「……そうか。ならいいけど」

「うつし、じゃあ返せって」

手にもつていた肉をアラムに返す。

「それに、例えなんかいたつて大したやつは来ない。森の深部には、キラーベア一つていう厄介なやつもいるけどな」

キラーベア一つという単語に少なからず反応してしまつ。コキトひとつでは軽くトラウマものだからだ。

もつとも、アラムが言つにはこの辺りにはいない。なら大して心

配する必要もないか、と警戒をとくユキト。

結果的に言つてしまえば、それは間違いだった。

ユキトが警戒を解き、自分の肉串を取ろうと手を伸ばした時、計つたかのように森の草影から飛び出してくれる獸がいた。

獸は人の優に三倍はありそうな巨体を、信じられない速さで動かし、砂利道をかける。

自分の定める獲物に向かって、威嚇の叫び声を上げる。久しぶりの獲物だ。逃がすわけには行かない。

そう思つたのかはわからないが、それくらいの気迫はありそうな勢いでようやくこちらに気付いた人間の“ひとり”に、自らの腕を振り下ろす。

鋭利な爪のついた丸太のような腕は、確実に目の前の人間……いや、食事を仕留めるだろつ。

だが、その腕が目標に届く前に、突然側面から衝撃をうけ、巨体が簡単に浮く。

「グウガツ……！」

浮いた身体に追い打ちをかけるように、さらに側面から鈍い衝撃が加えられ今度は吹き飛ぶ。

吹き飛んだ先にある岩にぶつかり、身体を奮い立たせて立ち上がる。キラーベアーの見る先にいたのは、これもまた人間だった。

その人間がゆっくりと歩いてくる。

「させねえよ」

発せられた声が空気を震わし、キラーベアーの元へ届く。たとえ近くの村では、見たらなにもせずにかく逃げろと恐れられているキラーベアーだが、それとて森の住人である。

生まれもつてある野生のカンは、敏感にその声に含まれる意図を理解した。

慈悲なく、奢りない。純粋な敵意と殺意。

「もう、仲間は殺させない。絶対に」

逃げるという選択肢はなかった。それを許さない声に、キラーベ

アーは本能に従うままに飛び掛かった。

背水の陣、とでもいうべき状態で襲い掛かってきたキラーべアーコキトは冷徹に見る。すでに四撃を叩き込んだため、右の脇腹あたりは陥没し、口から血が出ている。

優位であることを確認するが、油断はしない。目の前にいる獣は自分が何も出来なかつた相手だ。

一度だけみたさつきの動きは、かつてのそれと同様にそれ以上であつた気がする。

手加減は、しない。

そこからはもう、一方的な戦いだった。いや、戦いですらない、狩り。

キラーベアーコキトは遂にひとつも届くことはなく、一瞬で下に潜り込んだコキトは下から突き上げる。宙に浮いた身体は、それ以上動くことはなく。

重力に従い落下を始めた巨体を、トドメの回し蹴りが捕らえた。地面を何度も撥ねて転がったダークブラウンの巨体から、完全に動きが感じられなくなつてから、ようやくコキトは纏つていた【気】を解いた。それと一緒に安堵の息を吐く。

【勇者】だつたころに積んだ経験や鍛錬は、過去の敵わなかつた敵を越えるくらいにはなつっていた。

付着した血を流すため、川で手を洗つてると、後ろから口笛と共に拍手が聞こえてきた。

「すげえな、コキト。素手でのキラーベアーコキトを倒すとは思わなかつたぜ。助かつた」

「たまたま、だろ。向こうつも最初は俺に気付いてなかつた」

「謙遜すんなつて。あんだけ余裕あつたくせによく言つな」

謙遜といつわけではないが、たしかに余裕はあつた。身体を衝撃

から守るためにしか【氣】は使っていないし、攻撃はまったく食らっていない。

スピードも反射神経も、死に物狂いで身につけた自前のものだ。  
「それだけの力もあれば、この森でフラフラしても大丈夫だった  
わけだ。……って、そういうなんでこの森に居たんだ？」

俺の村のところじゃないなら、どうからか来たんだり？」

「あーっと、それは……」

これは……どうしようか。

この森にいる目的はなにもない。氣付いたらいたのだ。おそらく、  
また【召喚】されて。けど、それをそのままアラムに話してもいい  
のか。

『アラム』に会った時のように、説明すべきか。

「簡単に言えるようなものでもないし、とりあえず、戻つて食べな  
がらでもいいか？」

結論。とりあえず先延ばし。まずは美味しく肉を食べよう。  
笑つてそういうコキトアラムは、やはり仲の良いものだった。

## 第四話『仲の良むは不思議と変わらぬ』（後書き）

「キートの無双……っぽいですが、よく考えれば、序盤の敵で魔王を倒した勇者が一撃で屠れない相手は普通いないはず。ちよつとずつ、一週目の片鱗が見え隠れし始めた。

## 第五話『あれ、なんか既視感……って、その肉は俺のだ!』

「異世界、ねえ……？」

アラムは珍しくもその顔を難しげに歪めながら、じつと焚火を眺めた。肉串の肉にかぶりつきながら。実に器用だ。

ユキトから森にいた理由を聞いたのだが、焦られた挙げ句に聞いたのはわからない、の一言だった。

それで、はいですか、と言えるほどアラムは慎み深くはない。むしろアラムの長所は適度な思い切りのよさだ。引き際のギリギリまで攻めまくる。

そんなポリシーの元、渋るユキトからなんとか詳しく話を聞くと、正直なところ信じられないような事情があつた。

別の世界 地球と言つらしい があり、そこで争いごとのない平和な日常を過ごしていたら、歩いている時に突然、丸い紋様が足元に浮かび上がり、気付けば森の中にいたのだと。

「信じにくいかもしれないけどな」

「……だな。でも、ユキト。お前、そんな平和なところにいたわりには、随分と落ち着いてるし、さつきも信じられないような動きしてなかつたか？」

しまつた。

地球のことを少し詳しく話し過ぎたせいで、いま一番つつかれると困るところを聞かれてしまった。

嘘は言わないように言つたが、まさか隠し事があつて、それはすでに一度勇者としてこの世界を救つてお前にも会つたことがあるんだ、なんてことが言えるはずもない。心苦しいところはあるが、必要なことだと割り切つて嘘をつく。

「平和とは言つたけど、昔はそりや戦とかはあつたし、個人のいざこざも多い時代はあつたからな。そういうところから伝わつてゐる武術をやってたんだよ」

言つてから、コキトはそんなに嘘といつほどでもないが、と内心思つ。実際にコキトが戦う術を得るために教えを仰いだ相手はとする武術の使い手だったし、基礎はその人から学んでいた。

殴る、蹴るは反復練習の賜物の我流とはいえ、武術を嗜んでいたというのは嘘でもない。

ただ、コキトにたつて幸運なのは、アラムがその辺を気にすることがないことか。聞いたはいいが、コキトの返答で納得してほかに聞く様子もない。

「気付いたらここにいた、か。んー……もしかしたら……いや……違うか？」

アラムがひとりなにかを悩んでいる。ちらちらとコキトの方を見るものだから、どうしても気になってしまつ。

なにより、コキトはそんなアラムの姿に見覚えがある気がした。場所こそ違つたが、仕種は変わらない。その記憶が間違つていなければ、このあとアラムがコキトに聞いてくることは……。

「なあ、コキト。【勇者】になれるかもしねないとしたら、どうする？」

ああ……やつぱり。

「この世界には、まだ勇者が必要なのか。

想像していたとは言え、いざ聞くとなんだか苦笑しか湧いてこない。

「勇者、か。そうだな。もしなれるとするんだつたら……」

アラムの方を見る。かつて、コキトが旅をする中で、仲間を護るために命を投げ出した男だ。

そして、コキトの親友。

もし、今回も勇者として旅をすることになるのだったら、俺は「もし、勇者になれるのだとしたら、俺は全てを救える勇者になりたいな

「全て？」

「ああ。世界。国。人々。仲間。勇者として、みんなに希望や幸せ

を届けたい。なにより、友と喜びを分かち合えるようになりたいな」

前回の旅では、その大半を救うことはできた。だが、着いたら死んでいた村があつた。判断を間違えたせいで、無関係の人人が亡くなつた。目の前から消えた仲間がいた。

その度にユキトの心に傷が走り、

「おいおい、随分と欲張りな勇者様だぜ。でも、そつか……そういうのもいいな。気に入つた！ 僕もそれを手伝うぜ」

笑いながらアラムは言う。

「俺は本気なんだけど……」

「もちろんじやねえか。やるからには本氣。妥協なんてしないし、させないぜ」

そうだつた。アラムは適当などいふはあるが、妥協をする男ではなかつた。

なら、ユキトもそれに答えるべきだろ。

「妥協はナシか。まあもしなつたら、やることに妥協はしないぜ」  
ありえないだらうけど、とユキトは苦笑するが、内心はほぼ確定だらうな一つとのんきそのもの。

「いや、『冗談とかじやなくて、あるかもしねいんだぜ？』

「かもつて言つてるし……」

「それは、お前のさつきの説明を妄想に取り付かれたやつの与太話としないならの話だけだ。絶対にそうつて言えるようなものでもあれば別だけどよ」

いまのユキトは異世界で最後に着ていた普段着だ。元の世界に還つたときに、なるべく違和感を残さないように地味な服だし、こちらでもよくあるデザインだ。もつとも、勇者としてのユキトが全力で動いてもそう簡単には破れないような丈夫な素材を使つてはいるが。

とにかくそんな格好だから、信じてもうつ決定的なものにはならない。初めて召喚された時は学生服だったため、それなりに説得力もあつたような気はするが、いまはないものだ。願つても仕方ない。

他に身につけているものといったら、アリストイから貰った零のネックレスくらいだ。【聖剣】は、次の【勇者】が現れるまでまた宝物庫の中に眠っている。

「どうか、どちらもアラムに見せたらアウトだ。異世界から来たとは言つたが、ユキトは現代日本からとしか言つていないし、この世界では比較的広く知れ渡つてゐる王家の首飾りと【聖剣】を見せるのはまずい。」

【聖剣】は現物を見たことがある人はないから、なんとかなるとしても、ネックレスは完全にアウトだ。

いや、むしろ【勇者】のことを話してネックレスも見せたら信じてもらえるのでは。

でもそれはそれで面倒なことになりそうな予感がするわけで……。ユキトが悩みに悩みまくつていると、アラムが少し笑つて口を開いた。

「そんな深刻そうな顔すんなつて」

「いや、まあ……本当に証拠とかないからどうしたものかと」

氣を晴らそうとしてくれたのだろうが、ユキトにはイマイチ効果がない。それを感じたのかはわからないが、今度はアラムも考え込む。ユキトはユキトで、自分自身での変わらない問い掛けと答えの真つ中最中だ。

そんなユキトと違つてアラムが齒むそぶりを見せたのは少しの間だけだつた。

「確かめにいくか！」

「へ？」

なにを？

不意打ちをくらつたせいで続く言葉が出ず、ユキトの口からは変な声だけが出た。だがアラムはそれも眼中になじょうすで、言葉を続ける。

「行くんだよ。ここ最近【勇者】を召喚するつて噂だつた都市にー。」

そしてユキトはその言葉に微かな既視感を感じた。

正確な時こそ覚えてないが、たしかにコキトは知っている言葉だ。

そう。あの時、『アラム』にかけられた一言から始まつた。

「魔法大国、【王都シトノーシア】にだ！」

ただの学生だったコキトが、【勇者】となる長けれど短かつた旅が。

「一緒に行こうぜ。俺が案内するしよ。もちろん、行くよな？」  
あの時の自分、どう答えただろ？ たしか不安になりながら、じどりもどりに答えた気がする。

「いまはどうだろ？」

決まつていい。

「おう、もちろんだ！」

静かな笑みを浮かべながら、コキトは盛大に返事をした。

「なるべく早いほうがいいよな。まずはこの森を出て俺の村んどこのこ！」

「いいのか？ 急に行つたりしてよ」

「良いの良いの。飯と寝るとは俺の住居で住むから、村にはなんの迷惑もかかんねえよ」

そういえば、そだつたか、とコキトはひとり呟く。たしか一度説明を受けた。かなり忘れてはいるが。

「だがその前によ、コキト……」

「ん？ なんだ？」

「テメエが食わないなら、俺はそつちの肉も頂くぜー！」

「あつ！？ おい、アラムー！」

コキトの不意をついて手の中で遊んでいた串（ラスト一本。肉はまだ何切れがあり）を瞬時に奪つた。

なんとかコキトは取り返そうとするが、ヒラヒラと串が宙を舞ながらもアラムの口へ肉が入つていくあたりアラムの方が一枚上手だ。諦めて残りの肉串を食べようと手を伸ばすコキト。

「な、ない！？」

だが現実はそう甘くはなかつたらし。

「俺、まだ一本も食つてないのに……」

ユキトの悲痛な咳きが零れる中、アラムの側に七本田の串が甲高い音を立て落ちたのだった。

第五話『あれ、なんか既視感……って、その肉は俺のだ!』（後書き）

「ジヤヴュを感じていたら、まんまとアラムに食料を取られましたわ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4806z/>

---

異世界召喚（二週目）・ハードモード（仮）

2012年1月12日22時58分発行